

# Mowgli 物語における動物と人間の差異

## ——Mowgli を呼ぶ名称からの一考察——

若谷 苑子

### はじめに

Rudyard Kipling の *The Jungle Book* (1894) と *The Second Jungle Book* (1895) (以下、二冊をまとめて示す際には *The Jungle Books* と表記する) には、オオカミに育てられた少年 Mowgli の物語がある。*The Jungle Book* に収録されている Mowgli がオオカミに育てられることになってから Mowgli がジャングルから追い出されるまでを描いた “Mowgli’s Brothers”、Mowgli がサル Bandar-log に誘拐される “Kaa’s Hunting”、Mowgli による敵であるトラの Shere Khan の討伐と彼のジャングルへの帰還を描いた “Tiger! Tiger!”、*The Second Jungle Book* に収録されているジャングルの昔話が語られる “How Fear Came”、Mowgli の村人への復讐を描く “Letting in the Jungle”、宝物によって死んでいく人間を Mowgli が目撃する “The King’s Ankus”、オオカミとドールの戦いを描いた “Red Dog”、Mowgli がジャングルを再び出ていく “The Spring Running” の八編がそれである。それに加え、1893年に出版された *Many Inventions* に収録されている “In the Rukh” という大人になった Mowgli の短編もある。本論文では便宜上、*The Jungle Books* に収録されている八つの Mowgli の物語を示す際は、Mowgli 物語と記す。

さて、この Mowgli 物語は動物の言語を理解できる人間が登場する物語である。オオカミに育てられた人間という Mowgli こそが、動物の言語を理解し操ることができる存在だ。それと同時に彼は育った地であるジャングルを一度追い出され人間の村で暮らすことで、人間たちの言語も理解し操ることができる存在となる。動物と人間のどちらなのか、どちらでもあるのか、どちらでもないのか、という葛藤を抱える Mowgli を通して、Mowgli 物語には、動物と人間の差異、動物と人間がお互いをどう見なしているのか、Mowgli の帰属やアイデンティティをめぐる問題が描かれている。

例えば、Margaret Blount は *Animal Land: The Creatures of Children’s Fiction* (1974) において、Mowgli 物語を “misfits” (227) を描く物語として、E. B. White の *Stuart Little* (1945) とともに考察している。Blount は “*The Jungle Books* and E. B. White’s

*Stuart Little* are unique in that they have bridged the gulf [between the human and animal worlds], found the situation impossible and have had to turn back and break the bridge behind them.” (227) と述べており、動物の世界と人間の世界間の溝は横断できないと言う (234)。

もの言う動物という観点から研究する Tess Cosslett は、Mowgli 物語における言語の問題や動物たちの話し方について指摘している。“Child’s Place in Nature: Talking Animals in Victorian Children’s Fiction” (2002) では、Margaret Gatty の *Parables from Nature* (1855-1871)、Charles Kingsley の *The Water Babies* (1863) とともにもの言う動物の言語に注目し物語を読み解いている。*Talking Animals in British Children’s Fiction, 1786-1914* (2006) では、作中に描かれる人間と動物の差異や Mowgli に認められる人間の特徴を導き出しており、Mowgli 物語における動物の言語的側面が探求されている。

Sue Walsh の *Kipling’s Children’s Literature: Language, Identity, and Constructions of Childhood* (2010) では一章を割いて Mowgli 物語における動物と人間、そして子どもについて考察するなかで、ジャングルの合言葉 “Master Words” について言及している。Walsh は “Master Words” が動物たちにはあるが人間にはそれに相当する言葉がないことを指摘し (57)、さらに動物たちの “New Talk” についても指摘している (61)。

以上のように、Mowgli 物語における Mowgli と動物や人間との関係、その差異などが様々な側面から研究されている。また、Mowgli の名称に関連した指摘もいくつか見られる。*The Jungle Books* を帝国主義的観点から論じる角田信恵は「動物 = 原住民 = 子供」(97) という構図を提示し、Mowgli と動物たちの関係を分析しているなかで、“the Frog” という名称を持つ Mowgli は「無力な存在である限り、両生類であるカエルのように、人間 = 狼としてジャングルでの存在を許され」(104)、「人間の子供であるがゆえに、ジャングルの寵児でもありうる」(104) が、「次第に人間としての特性をあらわにするようになる」(104) 存在だと述べている。石井征子は Mowgli のアイデンティティの不安定性について論じるなかで、Mowgli の「称号」(32) “the Frog” と “Master” について言及し彼の持つ力が水に纏わっていることに注目して Mowgli の特異性を読み解いている。さらに Kaori Nagai は Mowgli の名称と彼の二重性という点に関連させて次のように述べている。

Mowgli the Frog is the name given to him by Mother Wolf, on account of his nakedness and vulnerability as a little human child, calling for the jungle animals’ protection. Ironically, the same name also symbolizes his privilege

as a human child: his two-worldliness and ability to traverse the jungle and the human world, just as the frog as an amphibian operates both on land and in water. Indeed, Mowgli is above all a 'man-cub', blessed with the charm to attract, and win over, a wide variety of powerful animals; (xxxix)

このように Mowgli を示す名称は Mowgli の位置づけを示すものだと言える。しかし同時に、Mowgli を示す名称は、それを使用する者の Mowgli に対する認識もまた示すものだと考えられる。

そこで、本論文では、これらの研究を踏まえたうえで、Mowgli 物語における動物と人間の差異を動物であり人間でもあるという二重性を備えた Mowgli に対するそれぞれの名称から考察したい。石井は既に述べたように Mowgli の “the Frog” と “Master” という称号から Mowgli がどのような存在として描かれているかを研究している。しかし、石井を含め先述の研究では動物が Mowgli を示すときに使用される名称 “man's cub” および “man-cub” についての言及は Nagai を除いてほとんどされていない。しかし、この呼び名は “Little Brother” という呼び名とともに動物たちの Mowgli に対する認識を反映したものであると考えられる。同時に、人間である村人による Mowgli の呼び名は、村人の Mowgli に対する認識が反映されていると考えられる。それらを分析することで、動物と人間の Mowgli に対する態度の差異が明らかになるだろう。

したがって、本論文ではまず、作中に描かれる動物と人間がそれぞれどのように描かれているかを概観する。次に Mowgli と動物の関係、Mowgli と人間の関係をそれぞれの Mowgli を示す名称から分析し、動物と人間の差異を明らかにする。なお、Mowgli が接する動物は主にジャングルの動物、人間は主にインドの村の人間である。そのため、本論文で主として扱う動物はジャングルの動物であり、人間は村人であることはあらかじめここに述べておく。

なお、Mowgli 物語の研究には、イギリス帝国の寓意化として Mowgli 物語を読み解くものもある。例えば Don Randall の *Kipling's Imperial Boy: Adolescence and Cultural Hybridity* (2000) はその一つである。しかし、本論文では帝国の寓意的側面ではなく、Mowgli 物語を動物と人間の狭間に生きる少年と動物と人間の関係を描いているという点から、動物と人間に注目して分析を行う。

## 第1章 Mowgli 物語に描かれる動物と人間

まず、Mowgli 物語において動物と人間がどのように描かれているかを確認する。

Mowgli 物語において登場する動物は擬人化されている部分と写実的な部分がある。この物語におけるジャングルには掟 (the Law of the Jungle) があり、それゆえにジャングルは秩序だったものとなっている。“How Fear Came”で Hathi が語る、かつてジャングルの動物たちは互いを食べることはなかったが、一頭のトラの行動によってジャングルの動物たちに亀裂が入り、さらには人間という恐怖がジャングルに持ち込まれたといった神話的な昔話もある。しかし、ヒョウやオオカミ、トラは狩りをして食料を得ており、トビは動物が死ぬのを待ってその肉を食べる。ジャングルの動物たちは人間の村には基本的に近寄らず、人間の道具も使わなければ Mowgli を除いた人間と会話もしない。彼らは、例えば Paddington や Narnia 国のもの言う獣のように、人間から人間と同等、あるいはそれ以上の特権的な地位として見なされることはなく、動物たちも人間は自分たち「動物」とは異なる存在であると認識している。

しかし、動物と一口に言っても様々だ。ジャングルには Mowgli を育てた群れで暮らすオオカミ、群れていないオオカミ (Won-tolla)、掟と彼ら自身の言葉を持たないサル Bandar-log がいる。Bandar-log の敵であるヘビやジャングルに攻め入ってくるドールもいれば、人間を異常に憎み、殺すトラもいる。しかし、これらのジャングルの動物たちは互いに会話ができる。ジャングルのものたちの合言葉 “Master Words” には三種類 (狩るもの、鳥、ヘビ) の言語があることが示されているが (*The Jungle Books* 24)<sup>1</sup>、それとは別の言語で日常会話は行われているようである。というのも、Baloo はヘビ語が話せないためにヘビ語の “Master Words” は Hathi を仲介して水ヘビから Mowgli が教わったとされているにもかかわらず (*The Jungle Books* 24)、ヘビの Kaa と日常的な会話をしているからだ (*The Jungle Books* 31-32)。しかしながら同じジャングルで暮らしていても Little People と呼ばれているハチたちは一切話さず、その言語についても語られない。このことを考慮すると、Mowgli と会話ができるのは基本的に先に述べた “Master Words” の三つの言語——獣、鳥、ヘビ——に当てはまる動物だと考えられる。また、人間の村で飼われている水牛は、Mowgli が彼らに話しかけることはあっても彼ら自身が言葉を発する場面は描かれない。このように、ジャングルの動物でも、獣、鳥、ヘビとハチのように立場が異なり、さらに村の人間に飼われている動物もまた彼らとは異なる立場に位置づけられている。

Mowgli 物語に登場する人間は、青木由紀子が指摘するように、村人と白人、そして Mowgli の三種類に分けることができる (218)。村人とはインド人のことだ。最初にジャングルを追い出され村へやってきた Mowgli は、村人がジャングルの動物を恐れていると考え (*The Jungle Books* 48)、さらに “They have no manners, these Men Folk,” (*The Jungle Books* 49) という感想を抱いている。村人と異なり、イギリス人は作中に実際に登場することはない。しかしその存在はテキストにおいてほのめかされている。イギリス人と村人の差異は、例えば、イギリス人がジャングルを躲すことができる存在として描かれている一方で村人はその術を持たない (*The Jungle Books* 208) というものが挙げられる。

Mowgli も人間ではあるが、村人と異なる価値観で生きている。彼はオオカミに育てられた人間である。Mowgli という名前の由来にも関係する “naked” (*The Jungle Books* 4) という身体的な特徴はもちろん、動物たちは彼をじっと見つめることはできず、動物たちが “Red Flower” (*The Jungle Books* 13) と呼ぶ火を恐れず扱うこともできる。しかし、彼は動物に育てられ動物の言葉を操ることができる。動物のなかで育った彼は “The King’s Ankus” では、Father of Cobras の守っている人間たちの殺し合いの原因になる宝物を見ても “Mowgli naturally did not understand what these things meant.” (*The Jungle Books* 243) というように宝物 (特に宝石) に対して人間が見出す価値を理解できず、実際にその価値観のずれが同じ人間であるはずの Mowgli とインド人たちの生死を分けるといったエピソードが描かれている。このように、人間と言っても、村人と白人と Mowgli は異なる存在として描かれている。

このように動物も人間もそれぞれ様々な立ち位置の者が存在するが、作中世界では動物と人間の間には互いによって線が引かれている。動物たちは自らを “Jungle-People” (*The Jungle Books* 26) と言い、人間を “Man” (*The Jungle Books* 3) と呼ぶ。Mowgli に対する “man-cub” という呼び方は、オオカミやクマといった同じ動物のうちの一民族として人間を位置づけているかのようにも見えるが、動物たちは自らを人間とは異なった存在として考えている。人間の特徴である「じっと見つめること」に伴う力 (Cosslett, *Talking Animals* 134) に加え、火や言語の使用、食べることと逃げることのどちらを優先するか、人間に対するアプローチの仕方などにも違いが表れている。例えば、動物は基本的に人間を襲わない。“How Fear Came” で語られるように、トラは唯一、人間を襲っても良い日を定められた存在であるが、動物たちは人間を恐怖と見なし、人間を襲うことはすなわち動物たち自身に死を呼び込むことであると考えている。それに対し、村の人間は人間を餌にかけし (*The Jungle Books* 189)、彼らが人間を殺す理由について Mowgli は “for idleness and pleasure” (*The Jungle Books* 246) と述べている。“Men are always more ready to eat than

to run” (*The Jungle Books* 250) という Mowgli の説明は、逆説的に動物はそうではないことを示しているし、他にもずっと口を動かしているなどという人間の特徴が Mowgli を通して説明される (*The Jungle Books* 188)。

村の人間たちも、ジャングルの動物たちは彼らとは明らかに異なるものとして見なしている。村人は動物たちの話をするが、例えば Messua の息子をさらったトラは “ghost-tiger” (*The Jungle Books* 52) と話される。これはジャングルを恐れているという村人、特に “Man” (人間／成人男性) の意識の表れであろう。この意識は、動物のことをよく知る、すなわち人間／成人男性である村人が知りえない動物の事情を知り、さらにはオオカミを従える Mowgli を村のハンターである Buldeo や村人たちが、後に確認するように追い出し、“devil” と見なしていることから推察される。また、村では牛が飼われているが、その世話をするのは基本的に少年——興味深いことに村の少年たちを Mowgli は “cubs” と同様の存在と見なしたことがある (*The Jungle Books* 51) ——で、大人はその場面にはほとんど登場しないこともまた、動物と、人間／成人男性が隔たっている証拠の一つであろう。

このように、動物と人間は互いを「他者」として見なしており、そのどちらか一方にしかならない者は基本的に動物と人間の間には引かれた線を超えていくことはない。Blount は “The Tragedy of *The Jungle Books* [...] is that the gulf cannot be crossed properly or permanently” (234) と述べているが、Mowgli 物語において、動物と人間は住んでいる場所は地続きになっているものの、両者の間には越えられない溝があり、乗り越えられるのはたった一人を抜かしてない。その越境を可能とする存在こそが Mowgli である。

## 第2章 Mowgli とジャングルの動物

Mowgli と動物たちとの関係を考察するにあたって、Mowgli に呼びかけるときの動物たちが用いる名称から分析を試みる。Mowgli の呼び名は、Mowgli を赤ん坊の頃から育てた母オオカミ Raksha によって命名された “Mowgli the Frog” (*The Jungle Books* 6) およびそれに付随して父オオカミから呼ばれる “frog” (*The Jungle Books* 20)、Shere Khan を倒して再びジャングルに戻ってきた後に付けられた “the Master of the Jungle” (*The Jungle Books* 235)、動物たちによる呼び名 “man-cub” (*The Jungle Books* 16) と “Little Brother” (*The Jungle Books* 10) がある。このうち、角田は “the Frog” について、Mowgli の二重性を両生類であるカエルを用いて表しており、さらに無力さを示していると指摘している (104)。逆に、“the Frog” と

“Master” という名称について石井は「Mowgli の係わる二つの世界を象徴する呼び名」(32) と指摘し、その二つの名はともに力を持つものとしての称号であると主張する (35-37)。しかし、これらの研究では動物たちが Mowgli を呼ぶときの他の名称であり、動物が Mowgli をどう見なしているかを示しているであろう “man-cub” と “Little Brother” という呼び名についてはほとんど触れられていない。既に述べたように Nagai は “the Frog” に加え “man-cub” について言及しているが (xxxix)、それを呼ぶ動物の認識という点については言及していない。本章では、これまで指摘されることが少なかったと言える二つの名称 “man-cub” と “Little Brother” に注目し、Mowgli と動物たちの関係を考察する。

Mowgli がジャングル、そして動物のもとにやってきたのは赤ん坊の頃である。やってきた赤ん坊を見て、父オオカミは “Man!” (*The Jungle Books* 4) と言った直後に “man’s cub” (*The Jungle Books* 4) と言い直す。単なる “Man” ではなく、その後 “cub” という単語を付け加えて Mowgli のことを示す。そして、父オオカミは彼の子ども、すなわち仔オオカミ (cub) を運ぶように Mowgli を Raksha のもとへ運ぶ。“A wolf accustomed to moving his own cubs can, if necessary, mouth an egg without breaking it, and though Father Wolf’s jaws closed right on the child’s back not a tooth even scratched the skin, as he laid it down among the cubs” (*The Jungle Books* 4). 父オオカミは Mowgli を “man’s cub” と呼ぶだけでなく、自らの子ども (cubs) と同列に Mowgli を扱っているのである。目の前にやってきた Mowgli を見て、母オオカミである Raksha の反応は次の通りである。

‘How little! How naked, and—how bold!’ said Mother Wolf, softly. The baby was pushing his way between the cubs to get close to the warm hide. ‘Ah! He is taking his meal with the others. And so this is a man’s cub. Now, was there ever a wolf that could boast of a man’s cub among her children?’ (*The Jungle Books* 4)

この場面では、仔オオカミと Mowgli の同等性が再び、今度は母オオカミの目線から描写されている。母オオカミもまた、Mowgli が彼女の仔オオカミたちの間に混じっていったのを目の当たりにして、Mowgli を単なる人間ではなく、人間という種類ではあるが、母オオカミの保護対象である仔 (cub) だと認識したと考えられる。だからこそ Raksha もまた、まだ名もない Mowgli を “man’s cub” と呼び、自らの子どもたちと同等の存在として受け入れたのだ。

Mowgli の呼び名である “man’s cub” と “man-cub” に使用されている “cub” という単

語は、オオカミなどの動物の仔の意味を含む単語である。そして Walsh が示しているように、“Man”とは人間と成人男性の双方の意味を持つ言葉である(62)。その意味では、Mowgli を示す“man’s cub”と“man-cub”という言葉は、Mowgli が「人間／成人男性であり動物の仔」であるという彼の二重性を示す呼び名であると言える。さらに、既に述べたように、ここでの“man”の用いられ方は、“wolf cub”といった動物の一種族としての用いられ方と類似する。その意味では、この呼び名における“man”は、動物とは異なった存在としての“man”ではなく、オオカミと同じく動物の一種族である“man”なのだ。

“[M]an’s cub”や“man-cub”という呼び名は、その後、動物たちが Mowgli のことを示す言葉の一つとなる。母オオカミが属する Seonee の群れの長 Akela、Mowgli の教師役を務める Baloo に Bagheera、Kaa などこの言葉を使っている。Mowgli の保護者的存在だけでなく、赤ん坊の Mowgli を殺そうとする Shere Khan ですら、Mowgli を“man’s cub”(The *Jungle Books* 5)と呼んでいる。その意味では、動物たちは、Mowgli の二重性を認識しているのだ。

作中では、Akela が人間の子ども全般を示す際に“cubs”という言葉を用いる場面がある(The *Jungle Books* 9)。この呼び方は、動物である Akela から見て人間の子どもが動物の仔と同じような存在であるということを示唆している。オオカミのなかで育った Mowgli もまた、人間の子どもを見て“cub”(The *Jungle Books* 15)と呼んでおり、彼もまた動物の仔と同様に人間の子どもを見なしていることが示唆される。

“[M]an’s cub”と“man-cub”という呼び名が Mowgli の人間であり動物であるという二重性を示していると述べた。だからこそ、彼はジャングルに動物の一員としてそこにとどまることができる。しかし Mowgli は、Bagheera に次のように説明される。“Many of the wolves that looked thee over when thou wast brought to the Council first are old too, and the young wolves believe, as Shere Khan has taught them, that a man-cub has no place with the Pack. In a little time thou wilt be a man”(The *Jungle Books* 12)。ここでは、Mowgli は“man”(人間／成人男性)となった場合、“man-cub”に含有されていた人間であり動物の仔であるという多様性を消失することになるために、ジャングルから出ていくと考えられていることが示唆されている<sup>2</sup>。

実際に“man-cub”である Mowgli が動物たちによって“cub”を剥ぎ取られ“man”とだけ呼ばれるとき、Mowgli はジャングルから出ていくように追い立てられる。

‘... Give me the man-cub, or I will hunt here always, and not give you one bone. He is a man, a man’s child, and from the marrow of my bones I hate him!’

Then more than half the Pack yelled: ‘A man! a man! What has a man to do



with us? Let him go to his own place.'

'And turn all the people of the villages against us?' clamoured Shere Khan. 'No; give him to me. He is a man, and none of us can look him between the eyes.' (*The Jungle Books* 16-17)

実際、この時点では Mowgli が赤ん坊の頃にジャングルにやってきてから約十年経っている。一般的に「子ども」と呼ばれる年齢であろう。しかし彼は上記の発言において、Shere Khan によって“man-cub”という言葉だけでなく“man”とも呼ばれる。そのとき彼は“cub”という動物の仔であるという徴を剥ぎ取られてしまっていると言える。Mowgli に残ったのは、“man”（人間／成人男性）であることを示す徴だけだ。その“man”という言葉を使ってオオカミたちにも Mowgli は追い立てられる。

“How Fear Came”では、Shere Khan は Mowgli に対して“Man-cub!” (*The Jungle Books* 156) と言った後、“the cub is neither man nor cub, or he would have been afraid.” (*The Jungle Books* 156) と述べ、Mowgli が人間でも動物の仔でもないと主張する。この言葉は Mowgli は動物と人間の双方にとって他者であるということを示しているが、この時点で Mowgli は追い出されない。しかし、先の引用のように Shere Khan が Mowgli が「どちらかでしかない」「人間でしかない」ことを強調すると、Mowgli を追い出すことに成功する。それはなぜなのか。

その答えは、Mowgli がジャングルを出ていく際の Bagheera の説明で示されている。“Now I know thou art a man, and a man's cub no longer. The Jungle is shut indeed to thee henceforward.” (*The Jungle Books* 19) つまり、“cub”ではなく“man”になってしまった Mowgli は、ジャングル——ここでのジャングルとは動物の世界の意味であろう——から閉め出されるのだと言う。この発言は明らかに、Mowgli の二重性が成長に伴って、すなわち子どもから大人になったことによって喪失されたことを意味する。つまり、人間であり動物であるという二重性を喪失し、人間／成人男性でしかなくなると、ジャングルという動物たちの世界は Mowgli に開かれた場ではなくなるのである。

しかし、“Tiger! Tiger!”の最後で人間の村からも追い出された Mowgli は再びジャングルに戻り、“Now I will hunt alone in the jungle.” (*The Jungle Books* 64) と宣言する。そこで彼と一緒にいるという選択肢を取るのは、Mowgli をはじめに受け入れたオオカミの父母、Mowgli が後に“an old gray wolf (not too wise: he is white now) was my father and my mother” (*The Jungle Books* 282) と説明する Akela、オオカミの四兄弟、そして Bagheera と Baloo だ。ジャングルに戻ってきた Mowgli は以後、再び動物たちに“Man-cub” (*The Jungle Books* 184) と呼ばれるようになる。

Kaa は Mowgli に “manling” (*The Jungle Books* 42) という語を用いることもあるが、クマ、ヒョウ、オオカミといった動物たちは、かつて Mowgli が Shere Khan や オオカミたちによって剥ぎ取られた “cub” という語を再び Mowgli に付与し、“man-cub” と呼ぶのである。しかし、大人になった Mowgli についての語りにおいて再び彼は “man” (*The Jungle Books* 64) と呼ばれ、さらに結婚したことが説明されることから、最終的に Mowgli が人間のもとへ帰っていったことが示される (*The Jungle Books* 64)。

また、Mowgli は動物たちから “Little Brother” (*The Jungle Books* 10) と呼びかけられる。これは同じ父母のもとで育ったオオカミの四兄弟からだけでなく、Baloo、Bagheera をはじめ、Mowgli に好意的な動物に呼びかけられる言葉である。これは精神的な繋がりを暗示する言葉であると同時に、血縁関係を示唆するようなこの言葉はおそらくは Mowgli がジャングルで身を守るために教えられた合言葉 “Master Words” に関係していると考えられる。

その “Master Words” とは、“We be of one blood, ye and I” (*The Jungle Books* 24) という、話し手が聞き手に自分は同じ血族の者だと宣言する言葉である。例えばこの言葉は、Mowgli が Bandar-log に攫われている最中にそれを目撃した初対面のトビである Rann に助けを求めるときに使われる。

He [Rann] whistled with surprise when he saw Mowgli being dragged up to a tree-top and heard him give the Kite call for—‘We be of one blood, thou and I.’ The waves of the branches closed over the boy, but Rann balanced away to the next tree in time to see the little brown face come up again. ‘Mark my trail,’ Mowgli shouted. ‘Tell Baloo of the Seeonee Pack and Bagheera of the Council Rock.’

‘In whose name, Brother?’ Rann and never seen Mowgli before, though of course he had heard of him.

‘Mowgli, the Frog. Man-cub they call me! Mark my tra-ill’ (*The Jungle Books* 29)

Mowgli はこの “Master Words” を主に Baloo によって教えられ、三つの言語——狩りをする者の言語 (“the hunting-people use” (*The Jungle Books* 24))、鳥の言語、ヘビの言語——で言うことができる。Baloo が “Master Words” を教えた理由は、この言葉が上述の三つの言語で言えさえすれば、無力な Mowgli の味方に獣も鳥もヘビもなってくれるからだ (*The Jungle Books* 24)。“Master Words” について Walsh は

“these words are so fundamentally linked to their referent that they have the force of invocation or command.” (57) と述べている。それと同時に、この言葉は話し手がある種強引に聞き手と血縁者になることを示す言葉でもある。動物たちが Mowgli にこの合言葉を教えることで、Mowgli にジャングルの動物たちと血縁関係にあることを自認させ、それを他の動物に対して宣言できる状態にする。それを宣言された動物は、半ば強制的に Mowgli の “Brother” になる。そして血縁関係が結ばれた動物たちは皆 Mowgli の味方となり、彼に危害を加えなくなる。それがこの “Master Words” なのだ。動物たちが使う “Little Brother” という Mowgli への呼びかけは、単純に Mowgli に対して精神的に親密であることを示すだけでなく、Mowgli が “Master Words” であるジャングルの動物と血族であることを示す合言葉を使用できる状態にあることを示唆している。

先の “Master Words” を Mowgli が動物に対して宣言することは、Mowgli 物語において基本的に練引きされている人間と動物が一つに繋がることを意味する。Cosslett はこの点について *Talking Animals in British Children’s Fiction, 1786-1914* のなかで、“Human and animal are related, but knowing the words is also a kind of trick, by which Mowgli compels the animals to do his will.” (134) と指摘している。とはいえ、この “Master Words” を教えられた Mowgli は “man-cub” という、動物と人間の二つの性質を持つ存在である。もし Mowgli が人間 (man) という性質しか持っていなかったならば、既に確認したように、ジャングルから追い出されていたと考えられる。しかし、彼は動物でもあった。ジャングルに生きるオオカミの群れの仔オオカミでもあった。そして仔オオカミであると同時に彼は無力な存在であった。だからこそ彼はこの “Master Words” を教えられ、三つの言語をそれぞれ操るジャングルの動物たちと関係を結ぶ力を手に入れることができたと考えられる。だからこそ、動物たちから “Little Brother” と呼ばれ、ジャングルに生きると家族として認識されているのである。

しかし、Mowgli は “Little Brother” であり、彼を “Little Brother” と呼ぶ動物にとって意識的にしろ、無意識的にしろ、彼が保護対象であることが示唆される。だが、Mowgli の年齢が上がると彼はトラを倒し、村をジャングルに飲み込ませ、ドールを倒すようになる。彼には “the Master of the Jungle” というジャングルにおける立場を示す呼び名が付け加えられる。ジャングルに村を飲み込ませた後、Mowgli は動物たちに僅かに恐れられているが (*The Jungle Books* 278)、“The Spring Running” では彼の知恵だけでなく身体的な力によっても動物たちに恐れられていることが説明され (*The Jungle Books* 303)、Mowgli のジャングルの動物たちのなかでの位置づけが変化していることが読み取れる。保護下に置かれていた無力な Mowgli

は年を経るにつれて知恵がつき力も強くなり、そして彼を保護していた動物たちが死んだり老化したりしたことによって彼と動物たちの立場は逆転する。それを示すかのように、Mowgli が最後にジャングルを出ていくときに彼を“Little Brother”と呼ぶのは、小さな頃から彼の教師役を務めていた Baloo と Bagheera とオオカミの兄弟だけである。

動物たちが Mowgli を呼ぶ言葉から Mowgli の動物であり人間である（それに加えて彼は成人男性であり子どもだ）という二重性と、Mowgli が先に挙げた“Master Words”を宣言することで動物と血縁関係になれる間柄であることが明らかになった。それでは、Mowgli と人間たちはどのような関係にあるのか。

### 第3章 Mowgli と村の人間

Mowgli はジャングルでは先述したように幾つかの呼び名を得ていたが、人間の間ではどうだろうか。人間と言っても Mowgli が関わるのは村人たちである。しかし、村人と言っても Mowgli に対する反応は二つに分かれている。一つは村人であるハンター Buldeo と、彼と同様に Mowgli を見なす村人たち、そしてもう一つは Mowgli を息子だとして面倒を見る Messua である。この二つの立場の人物による Mowgli の呼び名から、Mowgli と村人との関係を確認する。

Mowgli は、Buldeo が Messua の息子をさらったトラには足の悪い人間の幽霊が乗り移っているという話をしているとき、“Are all these tales such cobwebs and moontalk?” (*The Jungle Books* 53) と口を挟み、そのトラは生まれたときから足が悪く、幽霊が乗り移ったのではないことを話す。そのような Mowgli を“jungle brat” (*The Jungle Books* 53) と罵る Buldeo の言葉からは、Mowgli をジャングルに属する存在であると認識していることが示される。そして Mowgli がオオカミたちを操っていたことを知った村人たちは、Mowgli に対し“Sorcerer! Wolf’s brat! Jungle-demon! Go away! Get hence quickly, or the priest will turn thee into a wolf again. Shoot, Buldeo, shoot!” (*The Jungle Books* 61-62) と叫び、長老もまた“Wolf! Wolf’s cub! Go away!” (*The Jungle Books* 62) と彼を追い立てる。Buldeo だけでなく村の人間たちは最初は人間の少年として村に受け入れたはずの Mowgli を——少なくとも最初に Mowgli を見た女たちは Mowgli を“boy” (*The Jungle Books* 49) と呼んでいる——、オオカミとの繋がりを見たことで超自然的な存在、あるいはオオカミそのものやその仔と見なして村から追い出そうとする。この暴力的な Mowgli への態度は、村人の他者に対する姿勢だけでなく、ジャングルに対する畏怖を示唆しているのである。既

に述べたように、村人にとって、ジャングルを手なずけることは不可能なことである。地の文で説明されるように、ジャングルを躲すことができる存在としてイギリス人が位置づけられている (“He [The Gond] knew that when the Jungle moves only white men can hope to turn it aside.” (*The Jungle Books* 208))。それならば、ジャングルの動物を操る Mowgli は同じく人間であるイギリス人と同等の存在として認識されてもおかしくないはずだ。しかし彼はむしろジャングルに属する者、すなわち動物として認識される。もちろん、Mowgli の肌の色が褐色であるためにイギリス人とは違う存在だと考えることは妥当であろう。しかし、それだけでなく、Mowgli と動物の関係が動物同士の関係と同じように村人たちの目に映ったからこそ、Mowgli はジャングルの子、動物の仔として認識され追い出されたのだと考えられる。“Letting in the Jungle” では、村人たちの他者、特にジャングルに属する存在を排除しようとする態度はさらに暴力的なものとして描かれる。Mowgli の母であるとして Messua は “the mother of a devil” (*The Jungle Books* 193) と呼ばれ、夫ともども処刑されそうになり、Mowgli もまた殺害されそうになっている。実際には Mowgli の計画により Messua とその夫は安全な地へ逃げ、村はジャングルに飲み込まれ、村人たちこそがその地を追われることになるのだが、この村人たちのジャングルの動物に対する認識は、“devil” という言葉でも明らかかなように「悪」であり排除しなければならないものであることがわかる。

しかし村人であっても Messua だけは Mowgli を拒絶しない。彼女は Mowgli を赤ん坊の頃になくなってしまった息子 Nathoo に重ね合わせる。彼女は Mowgli を Nathoo と呼び、“but thou art very like my Nathoo, and thou shalt be my son.” (*The Jungle Books* 50) と言って、いなくなった息子として彼に接する。しかし、“Tiger! Tiger!” で描かれている時点では、Mowgli は息子として彼を扱う Messua のことを名前で呼んでおり、彼女のことを母として認識してはいないことが示唆される。彼が “Mother” (*The Jungle Books* 63) と呼ぶのは母オオカミの Raksha なのだ。Messua が Mowgli を息子として受け入れ、家に住ませミルクを与えても、Mowgli にとってこの時点で彼の母はオオカミである。しかし、Mowgli のことを Messua は最後まで彼女の息子だと信じ続け、Mowgli もまた Messua にだけは、既に確認したように村人たちから “Sorcerer” などと呼ばれていることを受けて、“I am no wizard” (*The Jungle Books* 62) と言って別れを告げている。そのことから、少なくとも Mowgli は Messua には村人に対する以上の感情を持っていると考えられる。

“Letting in the Jungle” において成長した Mowgli が Messua と再会したときも、Messua と Mowgli の関係は変わらない。Messua は成長した Mowgli のことを変わらず “Nathoo” (*The Jungle Books* 193) や “my son” (*The Jungle Books* 193) と呼

ぶ。彼女は“Aye, surely, my son. Man, ghost, or wolf of the Jungle, I believe.” (*The Jungle Books* 196) と伝え、Mowgliが何者であろうと彼を信じるという姿勢を貫く。Messuaにとって何者であってもMowgliは彼女の息子なのである。しかし、まだこの時点でもMowgliはMessuaのことを名前で呼んでおり、彼が母と呼ぶのはRakshaだけだ。

MowgliとMessuaの関係が変化するのは、“The Spring Running”においてである。この短編では、Mowgliが動物たちに馴染めなくなり、Akelaに“Mowgli will drive Mowgli.” (*The Jungle Books* 301)と言われた通り、彼が自らジャングルを出ていくことが現実となる。MowgliとMessuaとの再会は、Mowgliがジャングルのなかで孤独を感じたときに生じる。それまでMowgliがMessuaに対して自らをNathooだと名乗ったことはなかった。しかし、この場面で彼は“Nathoo! Ohé Nathoo!” (*The Jungle Books* 315)と名乗り、Messuaに声をかける。その呼びかけに対し、MessuaはMowgliに“Come, my son” (*The Jungle Books* 315)と声をかける。ここではMessuaには新たに息子が生まれている。しかし彼女にとってMowgliもいまだ息子なのだ。しかし、彼女はMowgliを見て次のように尋ねる。“But art thou him I called Nathoo, or a Godling, indeed?” (*The Jungle Books* 316) はじめてMowgliに彼は何者なのかと尋ねるMessuaに対し、Mowgliは“I am Nathoo” (*The Jungle Books* 316)と答える。彼女の息子なのだと言明するのだ。そのうえ、MowgliはMessuaに対してそれまでRakshaにしか用いなかった“mother” (*The Jungle Books* 316)という言葉で呼びかける。これは、MowgliのMessuaに対する認識が母に変化したことを示唆する。

なぜMowgliがMessuaを突然母として認識するようになったのか。この時点でMowgliはジャングルにおいて大きな孤独を抱いていた。だからこそ彼を無償で受け入れてくれる存在に縋りたいという感情が表れた結果とも考えられるのだが、Messuaと二度目の再会を果たしたとき、Mowgliがオオカミの父母、そして父であり母であるAkelaを亡くしていたことも理由の一つであろう。彼がオオカミの父母とAkelaを亡くしたことが描かれるのは、ドールとの戦いを描いた“Red Dog”においてである。オオカミの父母は“Red Dog”の冒頭で死んだことが説明されており (*The Jungle Books* 279)、Akelaはドールとの戦いのなかで死ぬ (*The Jungle Books* 301)。父母と慕っていたオオカミたちが死ぬことで、Mowgliの父母の地位は空席になっていたのだ。その折に、自分を常に息子として認識し接してくれていたMessuaに再会することで、Mowgliは彼女にそれまでとは違い“mother”と呼びかける。それはMowgliが彼女を「母」と認識したことを意味する。このMowgliの認識の変化には、Mowgliがジャングルの動物たちと、動物たちの本性が強く現れる春を共有す

ることができなくなったこととも関係しているだろう。それこそが Mowgli の孤独感、疎外感の正体でもある。約十七歳の Mowgli は、それまで動物たちと楽しめた春がその年は楽しめず孤独を感じていた (*The Jungle Books* 307-308)。春とは “Time of New Talk” (*The Jungle Books* 307) であり、動物たちは皆語り合いはじめるが、それに Mowgli は馴染めなくなっているのだ。さらに Mowgli は Messua からも “man” として認識される (*The Jungle Books* 317)。Mowgli は “man-cub” ではなく、“man”、すなわち人間／成人男性になってしまったのだ。だからこそ Mowgli は同じく人間である Messua を母と認識し、それだけでなくジャングルの動物たちと別れを告げ、人間のもとへ去っていったと考えられる。

村人と一口に言っても Mowgli に対する態度は Buldeo らと Messua では大きな差があるのだが、Messua は Mowgli の家族であることを主張し受け入れるという意味ではジャングルの動物たちと同様のやり方で Mowgli を受け入れているとも言える。しかし彼女は特例で、大半の村人は Mowgli を受け入れず排除の対象とする。ここにおいて明らかに動物と村人とで Mowgli に対する態度が異なっているのだ。その理由を最後に考察してみたい。

#### 第 4 章 Mowgli に対する動物と村の人間の対応の違い

作中に登場する動物も人間も、彼らの間に明らかな線を引いている。しかし、動物の多くは、Mowgli がいずれ人間のもとへ戻ることを口にしており、“man-cub” と呼びながらも Mowgli を受け入れるが、対照的に村人たちは Mowgli を排除する。この差とは何だろうか。

Mowgli は動物たちに付けられたその呼称にあるように、“man” であり “cub” である。動物たちがそれを示す “man-cub” という呼び名で呼んでいることは、動物たちが人間であり動物であるという彼の二重性を認めているということの意味する。それと同時に “cub” は子ども、すなわち親や大人の保護下にいる状態をも示す言葉である。だからこそ、親の保護下にいる “cub” であれば、そしてそこに保護者として動物からも Mowgli 自身からも認識される動物の親がいれば、人間だとしてもオオカミと兄弟になることができる。彼は “Master Words” によって他の種の動物たちとも血縁関係を結ぶこともできる。Nagai は “Mowgli’s jungle is presented as a space of friendship and hospitality, in which different nations and races co-exist harmoniously under the ultimate authority of the White Man.” (xxxvii) と述べているが、動物たちが人間であり動物であることを強調しながらも半動物である Mowgli を受け入れる

ジャングルは、多様性を認める場所だと言える。

そもそも、北原靖明が述べるように、「ジャングルは、多種の動物が生息する多言語社会である」(10)。ジャングルは多様性の場なのだ。それは、ジャングルの“Master”が複数存在することからも示唆される。“[T]he Master of the Jungle”として作中で言及されているのはゾウのHathiとLittle People(ハチ)、そしてMowgliが挙げられる。一種類の動物や一匹の動物が“Master”なのではなく、複数の種類の動物たちが“Master”なのだ。さらに、Kaaの“[...] Tell me, Master of the Jungle, who is the Master of the Jungle?”(*The Jungle Books* 287)という問いかけに対してMowgliが“These [the Little People]”(*The Jungle Books* 287)と答えていることから、同時に“Master”が複数存在することが示される。この点もジャングルの多様性を示していると言えるだろう。ジャングルではそれぞれの動物がそれぞれの生き方をしている。しかし、そこにはthe Law of the Jungleがあることで秩序もある。そして、角田が指摘するように、そこに異物が入ったとしても基本的に無力であれば許容される(104)。そういった場がジャングルなのだ。

しかし、Akelaが作中で口にしたように、たとえ動物たちが追い出そうとしなくても、最終的にMowgli自身が自らジャングルを出ていくことになる。それが実現されるのはMowgliが動物たちのなかで孤独感を覚えた春である。Free Peopleとして生き、父母が死に、保護者が老化し、成長に伴う力の変化によってMowgliと動物たちの関係は当初の無力なMowgliとそれを保護する動物たちというものから逆転していく。それに加えてMowgliは“New Talk”があふれるジャングルの春を楽しめなくなる。そんな折に彼はMessuaと再会し、彼女を母と呼ぶ。そしてMowgliは人間のもとへ帰っていく。動物とジャングルは、Mowgliを追い出したのではない。Akelaの言う通り(*The Jungle Books* 300-301)、Mowgli自身が彼を突き動かしたのだ。

しかしMowgliは、“The Spring Running”の終わりで四兄弟が彼とともにいると宣言したこと、そして彼の大人になってから仕事につき結婚することを描いた“In the Rukh”においても人間の集団とは別にジャングルで四兄弟のオオカミたちと暮らしていることからMowgliの動物との繋がりが断たれていないことが示唆される。“In the Rukh”では、Mowgliの妻となる少女(Gisborneのもとで働くインド人Abdul Gafurの娘)がMowgliと四兄弟の集団に参入する。ここでのMowgliの世界は、警備隊として白人のもとで働いているものの、森に囲まれたものであり、男(父)－女(母)－赤ん坊－兄弟(オオカミ)で構成されている。兄弟が男(父)の兄弟であることを除けば、この構図はMowgliがFree Peopleとして狩りをしていた頃の父母オオカミ、Mowgli、オオカミ四兄弟の構図と類似している。そして、彼は“man-cub”ではなく“The Spring Running”でMessuaが言ったように神のような存在として認



識される (“In the Rukh”でMowgliを見たドイツ人は“he is der god!” (*The Jungle Books* 341) と言う)。人間でも動物でもない存在のまま、そうでいられるところ (= ジャングル) に Mowgli はとどまり続けている。このことから、ジャングルが他者を排除しない多様性を象徴する場であることが示唆されている。

それに対して村はどうであろうか。Mowgli が “The Spring Running” でジャングルを出て行った以降の物語は “In the Rukh” しかなく、実際に人間たちにどのように彼が扱われていたかはわからない。しかし、“man-cub” であった Mowgli を排除した理由については推測することができる。

村人たちが Mowgli を追い出した理由は、既に考察したように Mowgli の持つ動物や (そしてその背後にある) ジャングルとの繋がりが許されなかったからだ。“man-cub” である Mowgli の “cub” に含まれる動物を示す要素が村人たちには受け入れられなかったのである。

ジャングルと比較すると、村は水牛がいるものの、住んでいるのは人間だけであり、その意味では単一的な場である。ジャングルのように様々な動物が住む場ではないし、牛たちは言葉を話さず、村には人間が話す言葉しかない。ジャングルには血縁的連帯感を他者と共有する言葉でもある “Master Words” があるが、Walsh の指摘するようにそれに相当する言葉もない (57) (それはもちろんわざわざ血縁関係を宣言しなくても同じ「人間」だからだろう)。そして Mowgli が、人間が知りえないはずの動物の情報を知っていたり、オオカミたちと繋がりを持っていたりすることも許されない。それが明らかになると、Mowgli は “man” であることを否定され、既に確認したように “Sorcerer” や “Wolf’s brat” と呼ばれる。村人は動物たちのように Mowgli が “man” であると同時に “cub” であることを認めず、ジャングルから Mowgli を “man” だとして追い出した、人間を憎む Shere Khan やそれに同調したオオカミたちと同じように、彼を一方に属する存在として排除する。

動物であり人間である、大人であり子どもである Mowgli を通して動物たちと人間の二重性を持つ者への対応の差が示されているが、それは村、そして人間がインドの村人という単一なものとして描かれる一方で、ジャングル、そしてジャングルの動物という集団が多様なものとして描かれているという差異から生じているのである。

## おわりに

Mowgli 物語における Mowgli の呼び名から、動物と人間の差異を考察してきた。そこから、動物という要素を備えていれば他者を受け入れる動物 = ジャングルと、多

様性を認めず他者を排除しようとする人間（村人）という差異が明らかになった。Mowgli は動物と人間という二つの性質を持つ存在である。それゆえに Mowgli は動物と人間の間に引かれた線を越え往来できる存在だが、最終的に彼は片方の世界、人間の世界へと戻っていく。それは Mowgli が年齢的に成長したからだけではなく、彼の“cub”という動物の仔であるという部分が経年に伴う父母の喪失、動物界での立場の逆転によって失われ、Man すなわち人間／成人男性という部分が残ったことによって引き起こされたと考えられる。それまで Mowgli が動物たちと共有していた部分を喪失したことで、彼は動物の世界で疎外感を抱き、人間の世界へ帰っていくのである。

とはいえ、既に述べたように、Mowgli は完全に動物との繋がりを断ったのではない。彼は四兄弟とは常にともにあり、ジャングルで生きている。しかしそう見えて彼はどちらにも属さない独自の世界をジャングルで築いている。しかしここにおける Mowgli の動物との繋がりは、閉鎖された「家族」という繋がりであり、どの動物とも“Brother”であったものとは異なる。Mowgli がともにいるのは彼と父母をともしるオオカミ四兄弟であり、他の動物たちは姿を見せない。Mowgli が常にともにいるのは彼の動物の家族であり、人間の世界へ戻るきっかけとなったのも Mowgli が家族として認識した存在である。そして Mowgli とオオカミたちの集団に参入する少女もまた Mowgli と家族となる存在だ。Mowgli の他者との繋がりで最後に残ったものが家族であり、それが動物と人間であることは、Mowgli がいまだ大人（man）になっても“man-cub”という二重性を備えていることを示している。また、彼が住んでいるのが依然としてジャングルであることは、ジャングルそのものが多様性を受け入れる場であることを示唆する。

Mowgli 物語では、動物と人間が互いを分断する線を引いている。それゆえに、その双方に属する Mowgli は多くの研究者が指摘してきたように自分は動物なのか人間なのかという問題に直面し、不安定な存在となる。しかし、人間という他者であり動物でもあるという彼の二重性を認める動物たちと、人間か動物かというどちらか一方であることを強制する村の人間たちという対比は、動物という様々な種によって構築される集団と、人種の差はあれども単一の種によって構築される人間という集団の在り方を如実に描き出している。この差異こそが Mowgli が動物たちの暮らすジャングルに大人になってからもとどまり続ける理由だと考えられる。

しかしながら、本論文では Mowgli 物語に描かれる動物と人間との差異の一端を示したに過ぎない。Mowgli の動物との関係や人間との関係は他の研究でなされてきたように様々な側面から探求することができ、それらを包括し見渡すことが必要であろう。

## 註

- 1 *The Jungle Book* と *The Second Jungle Book*、および “In the Rukh” の引用は、Oxford World’s Classics の *The Jungle Books* (W. W. Robson 編、Oxford University Press, 2008) から引用した。以降、本書からの引用は書名と引用頁数のみを示す。
- 2 John McBratney はオオカミたちが Mowgli を追い立てる理由として次のように説明する。“By the end of “Mowgli’s Brothers,” however, some wolves think the wolf-boy has grown too old to maintain his dual identity and press for his expulsion” (94).

## 引用文献

- 青木由紀子 『七つのテーマから読み解く英米児童文学』 ミネルヴァ書房、2009年
- 石井征子 「*The Jungle Books*における越境する不安定な “Master” Mowgli」  
*KASUMIGAOKA REVIEW* 12 (2006) : 31-45.
- 北原靖明 「キプリングの帝国：現実と夢の境界」『キプリング：大英帝国の肖像』橋本楨矩、桑野佳明編著、彩流社、2005年、1-30頁
- 角田信恵 「茶色の皮膚、白い仮面：『ジャングル・ブック』について」『ラドヤード・キプリング：作品と批評』橋本楨矩、高橋和久編著、松柏社、2003年、91-123頁
- Blount, Margaret. *Animal Land: The Creatures of Children’s Fiction*. New York: William Morrow & Company, 1975.
- Cosslett, Tess. “Child’s Place in Nature: Talking Animals in Victorian Children’s Fiction.” *Nineteenth-Century Contexts* 23 (2002): 475-495.
- . *Talking Animals in British Children’s Fiction, 1786-1914*. Surrey: Ashgate, 2006.
- Kipling, Rudyard. *The Jungle Books*. Edited with an introduction and notes by W. W. Robson, Oxford World’s Classics, Oxford: Oxford University Press, 2008.
- McBratney, John. *Imperial Subjects, Imperial Space: Rudyard Kipling’s Fiction of the Native-Born*. Columbus: The Ohio State University Press, 2002.
- Nagai, Kaori. Introduction. *The Jungle Books*. By Rudyard Kipling, Edited and with an introduction and notes by Kaori Nagai, Penguin Classics, London: Penguin Books, 2013, xix-li.
- Randall, Don. *Kipling’s Imperial Boy: Adolescence and Cultural Hybridity*. New

York: Palgrave, 2000.

Walsh, Sue. *Kipling's Children's Literature: Language, Identity, and Constructions of Childhood*. Surrey: Ashgate, 2010.